

INFORMATION

●オランダの創作人形公募展

オランダ・ベルギー人形作家協会 DABIDA が「ハニー・サリス賞」の公募展を行います。世界各国のどなたでも応募できます。

詳細・過去の受賞作品は下記でご覧になれます。
http://www.dabida.eu/Award_UK.php (オランダ語・英語のみ)。

応募方法 テーマ「Joy」(喜び)

立体作品であれば、一点でも組作品でも OK。素材自由。応募料無料。応募資格無し。

作品写真データを応募者情報とともに、下記アドレスまで送信。

情報:応募者名、住所 + 電話番号、E メールアドレス、出品作品タイトル、素材とサイズ、作品の簡単な説明

写真: 900x600 ピクセル目安で、全身とポートレートを各 1 点

提出先 (問い合わせも) info@dabida.eu (英語・オランダ語)

※切 2013 年 2 月 1 日

審査ポイント: 表現力・オリジナリティ・個性と技術

※ 2 月初旬に応募作品すべてが DABIDA のウェブサイトに掲載され、そのなかから 10 点が審査員によって選抜されます。

3 月初めまでに 3 点の優秀作品が発表され、4 月 21 日の第 7 回 DABIDA DAY で展示、そのなかからハニー・サリス賞が選ばれます。

優秀作品 3 点とともに、応募作品は DABIDA のウェブサイトで一年間紹介されます。

●チーム・コヤアラ主催 創作人形公募展開催について 2013 年は見合わせ

公募展では、作品を公にし公正な評価を問うことが大きな目的と思いますが、チーム・コヤアラでは、受賞した人、出品した人にとって次のステップになることも大切だと思っています。そのひとつが今回のロシア展巡回でもあったわけです。2013 年度の公募展開催については、我々少ない人数で公募展開催の負担を増やすより、今年の成果をきちんと見直し発展させようということになり、来年はチーム・コヤアラと今年の受賞者、優秀者の作品の展覧会を行うことにしました。よって、2013 年度の公募展開催は見送り、2014 年の準備を充実させたいと思います。皆様のご理解をよろしくお願い申し上げます。

展覧会開催については、関係する皆様に追って、ご連絡を差し上げますので、よろしくお願い申し上げます。

HAZEKI OFFICE と青の羊の新企画!

●FANTANIMA! 2013

ロシアの TEDDY FUN がやってくる!

ロシアや周辺諸国では、若手を中心に個性的な動物のぬいぐるみやオブジェを作る作家が続々と輩出しています。そんな 40 名の海外作家作品に加え、日本からも 30 名を超える作家がこの企画のためにユニークな動物作品を制作! 見逃せない一大イベントです!

●東京展 2013 年 4 月 3 日 (水) ~ 4 月 9 日 (火)

丸の内オアゾ 丸善本店 4F ギャラリー

入場料 無料

●関西展 2013 年 4 月 15 日 (月) ~ 4 月 22 日 (月) 予定

京都: 昔人形青山 (予定)

大阪・珈琲 / 書肆アラビク・乙女屋

※詳細は次号発送時に同封する DM でご確認ください。

主催 羽関オフィス / TEDDY FUN/IDAA

企画協力 青の羊 協力 チーム・コヤアラ

近日中にウェブサイト開設予定! URL <http://www.nonc.jp/fantanima!>



今年度の最優秀作

紙上展

今井 七重

(いまい ななえ)

「ごきげんよう」

布、綿、革、毛糸 (頭髮)

60cm

浮世絵の顔を真似てみた
くて。

おだやかな、まろやかな、

ふっくらした「浮世小町」

です。

〔講評〕

顔を平面にしたり、素材

の扱いも面白いアプロ

チだと思いますが、この

サイズであれば、もっと

ダイナミックなデフォル

メや遊びを取り入れたほ

うが良いと思います。も

しくはサイズを凝縮して

造形に緊張感を持たせる

か。なにかを壊そうとし

ながら、そつなくまと

まってしまう大人しさ

を感じてしまいます。



『第 4 回人形演劇祭 "inochi"』

日程: 2013 年 2 月 15 日 (金) ~ 2 月 24 日 (日)

会場: 調布市せんがわ劇場、仙川地域各所

人形演劇企画室β★Facebook / Twitter にて随時情報更新中! ★

■Facebook <http://www.facebook.com/ningyo.engeki>

■Twitter @ningyo_engeki

せんがわ劇場と仙川の街をステージに

して、第 4 回を迎える人形演劇祭が 2013 年

2 月に開催されます。

新しい表現に挑む人形演劇との出会いが、

「いのち」について考えるきっかけとなり

ますように。黒谷都の「KUROSOLO 壱番

半月」は、はじめ、第一線で活躍するアーティ

ストによる充実したプログラムに、どうぞ

ご期待ください。チケット好評発売中

お問い合わせ・チケット申込みは

●調布市せんがわ劇場

劇場窓口 (9:00 ~ 19:00)

TEL.03-3300-0611

※休館日: 第 3 月曜日 / 12 月 29 日 (土)

~ 1 月 3 日 (木)



コヤアラ・クラブ入会条件

入会金なし 年会費: 2000 円 (更新時に 2 年分一括払いの方は 3900 円となります。)
年 4 回 (1・4・7・10 月) のチーム・コヤアラのニュースレターと DM 便が届きます。

お申し込み方法

年会費 2000 円を以下の方法でご送金ください。

〔郵便振替〕 通信欄に「コヤアラ入会」とお書きください。

送金先 「口座番号」 00140-7-358370 「口座名」 チーム・コヤアラ

※ご入金を確認できたらチーム・コヤアラよりハガキで受領証と会員証を兼ねたお知らせ
をお送りし、次の号から「コヤアラ通信」をお送りします。更新時には、有効期限内の最
後の号を発行するときに、更新のお知らせを同封いたします。

DM 同封希望の方 (発行月から 3 ヶ月の間に展覧会を予定されている方)

事前に枚数などお問い合わせの上お申し込みください。同封 DM は発行月の前月 20 日に

チーム・コヤアラ必着でお送りください。

同封料金 コヤアラ・クラブ会員: 2000 円 一般 (非会員): 3000 円

紙上展応募の方

会員の方の人形の自作品の写真を受け付けております。

13 号×切 2013 年 3 月 10 日 (必着)

以下を下記まで、郵送かメールでお送りください。

作品写真 2~3 点 (全体・アップ・裸形) サイズ: ハガキ大。

「会員番号」「作家名」「タイトル」「素材」「サイズ」他、簡単なコメントなど。

※何点でも応募できますが、誌面の都合上掲載はお一人 1 点になります。

※応募作品はウェブ上で公開されることもあります。(講評は紙面のみ掲載)

※応募書類は返却いたしません。

個人情報について

頂いた個人情報はチーム・コヤアラの業務委託を受ける HAZEKI office が厳重に管理します。

名簿はチーム・コヤアラのニュースレター発送に使用させていただく他、チーム・コヤアラの

趣旨に沿って DM クラブ会員にとって有意義と判断した情報を伝達する以外には一切使用せず、

チーム・コヤアラ以外の第三者が閲覧、使用することは一切ありません。

各お申し込み・連絡先

チーム・コヤアラ

東京都東村山市久米川町 3-27-57 HAZEKI office 内

TEL 042-395-7547 (担当 ハゼキ)

FAX 042-395-7975

URL <http://www.ab.auone-net.jp/~koyaala/>

Email team_koyaala@yahoo.co.jp

KOYAALA 通信 編集責任者 羽関チエコ (HAZEKI office)

©KOYAALA TSUSHIN 2010, printed in Japan 本紙記載の記事・写真の無断使用・転載を禁じます。



KOYAALA 通信 No.12

Jan.1
2013



「KOYAALA 通信」は、チーム・コヤアラがコヤアラ・クラブ会員に発行するニュース・レターです。年 4 回発行 発行日 (予定) 1 月 1 日、4 月 1 日、7 月 1 日、10 月 1 日

謹賀新年 今年もどうぞよろしくお願いいたします。

ロシア 展示レポート

本紙前号でお伝えしました「創作人形公募展」の受賞作品 4

点のほか、日本人作家作品を 10 月から 11 月にかけて、ロシ

アで展示してきました。展示した会場と時期は右の通りです。

モスクワでは「ART OF THE DOLLS」が、昨年まで開催して

いたマネージ国際展示場から郊外のクロクス見本市会場に急

遽変更。会場が変わってもボルシャゴヴスカヤのダイナミッ

クなアートディレクションによるインスタレーションを軸に、

ワクタノフ・ギャラリーのイリナ・ミジナの企画や写真によ

るインスタレーションが人形展のスケールを超える印象を与

えていました。その周辺に個人作家やディーラーのブースが

参加する形です。

ボルシャゴヴスカヤが今年のテーマに選んだのは土地の守

護霊ともいうべき「ゲニウス・ロキー」で、このテーマを掲

げたときに松沢香代の作品を知った彼女は、この展示になく

てはならないものとなりました。他にもロシアの大地のシャ

ーマニズムを思わせる展示が強い印象を残しました。

他に、パリ在住の大島和代さんも招待展示され、「乳歯

BOX」と「1927 年の母」を展示、減多にアトリエから外に出

ないこの作家と作品に直に触れるチャンスに、会場を訪れる

人々の賞賛の声と嘆息が絶えませんでした。

他に日本からは、大竹京さんや粧順さん、レブンクルさん

らが展示をされていました。

引き続き、ウラルのエカテリンブルグで開催された「ウ

ラル創作人形作家協会フェスティバル」では、木造の古い文

学博物館の建物で展示が行われました。ウラルの各作家のユ

ニークな作品も骨董家具のなかで、それぞれの持ち味が生か

されていました。日本人作家による国籍不明な作品は、エキ

ゾチックな存在感がありました。この展示期間中に行われた

「不思議な動物」コンテストでは、ウラルで活躍するアニメ

作家と演劇演出家、UDAA 会長と羽関の四人が審査をつとめ、

イフンケ作品が大賞に選ばれました。

いずれの地においても、日本人による独創的で技術力の高

い作品は、高い賞賛と評価を浴び、参観者の方からとても喜

ばれました。

今回、チーム・コヤアラの作品が巡回したスケジュール

■ 10 月 25 日 ~ 28 日

DOLLS OF THE WORLD 文化財団主催

第 3 回国際モスクワ展「ART OF THE DOLLS」

招待出品 TEAM KOYAALA プロジェクト

会場 Crocus Expo (クロクス)

■ 11 月 1 日

Pleiades Gallery ブライアデス・ギャラリー (一部作品)

■ 11 月 3 日 ~ 4 日

URAL DOLL ARTISTS ASSOCIATION FESTIVAL

会場 ウラル州立 19 世紀文学博物館 (エカテリンブルグ)

出品

受賞作家 / 尾花智子、皆川優子、長谷川裕子、長岡哲生

チーム・コヤアラ招待 / 矢部藤子、河野滋子、イフンケ、

Noe、くるはらきみ、咲耶、西村 FELIZ、松沢香代

Natalia Kritova

ARR OF THE DOLLS 会場

ロシアの展示で思うこと

ここ数年来、毎年のようにロシアの人形展に通うようになっていく。

特にロシアという国に関心があったわけではないが、社会主義時代に皆無だった創作人形の世界の成長ぶりは、無視できない勢いがあった。

この20年、ロシアは社会主義以前への懐古趣味、社会主義へのノスタルジー、資本主義文化への傾倒といった、みつつの風潮を同時期に消化し、時を進めようとする貪欲な勢いがある。そのせいか、毎年訪れる度に、町や人々の表情が変わっていくように思う。社会主義時代に贅沢な文化と廃棄されていた人形文化の担い手は、一気に息を吹き返す。持ち合わせていたスラブ系の美的センス、手先の器用さで、それまでの各国の創作人形の魅力的な特徴をロシア風創作人形の個性に織り込んでいった。

そして人形という媒体への執着ぶりは、日本人のそれとよく似ている。ロシア人は社会主義の時代を経ても、シャーマニズムの大地の風俗を精神文化から捨て去ることができなかったらしい。今は若い人のあいだでも民族文化への傾倒が流行にもなっているそうである。もちろん、「ひとがた」もその要素のひとつである。

人形文化が創作人形という装いも新たに復興するのにあわせ、国際的な人形展を開催する試みも行われた。ワクタノフギャラリーやドール・サロンといった主催者がそのきっかけをつくる。しかしそのやり方は欧米の見よう見まねで、内容的なシステムまで吟味されていない。

たぶん、内容の吟味をする時間もなく、国内のニーズがふくらみ規模が一人歩きしてしまったのだろう。ロシア国内の作家だけで、それなりに華やかで大規模な人形展が開催できるほどに市場は成長した。

毎回我々が参加しているART OF THE DOLLSにあつては、企業型の見本市スタイルをとっているからブース代も高額で、出展者の大半を占める一般作家が賄っていけるのだろうかとか疑問がわくが、連続開催を可能にし、かつサンクトペテルブルグまで開催を広げていくほどの勢いを見せている。(チーム・コヤーラは、毎年招待出品である。)

しかし今年、この世界最大規模を誇るART OF THE DOLLSが、ピンチを迎えた。モスクワの赤の広場のマネージ国際展示会場の使用を、運営団体によっていきなりキャンセルされたのである。その理由は様々に取りざたされているが、そのどれもに共通しているのが、マネージの新しい執行部がこの施設を純粋芸術の普及に限定するという方針を明確にし、ART OF THE DOLLSの趣旨はそれにそぐわなかったということだ。ここがロシアらしいのだが、その決定は開催のたった2ヶ月前に下されたという。仕方なくART OF THE DOLLSの主催者は、急遽、他の展示会場を探した。代替会場として探し当てたクロクスは、日本の東京で言うと、武道館から幕張メッセに変更したのに相当するような距離感と規模の違いの巨大な会場である。会場は遠く、広大になり、かつコストがかさんだ。この急な変化により、当然、準備にも支障を来した。当初参加を予定していた出展者のキャンセル続出、会場レイアウトの変更。しかし、主催者はその逆境でなんとか体裁を整え予定通り開催した。

特別企画のアートプロジェクトは広い会場に映えてみえた。しかし、主催者や関係者をファッションモデルのように撮影し、大のぼしのパネルにして壁面を飾る企画は自画自賛と見られても仕方なく、その反面VIP待遇を受けるべきイタリアから参加したブリギット・デヴァル(欧米の創作人形の創始者的存在)が壁際に押しやられてひっそりと展示しているのを見ると、主催者は知識がない、作家へのリスペクトがないと影で批判された。他にも主催者の姿勢への不満の声を多く聞いた。

私は主催者に「本当に国際的な人形展に育てたいのか」と疑問を呈した。特にこのイベントの一番のスポンサーであり主役である一般参加者が、高額なブース代やカタログ料を支払ってまでこの規模を望んでいるのかが気になった。混乱のなか、疲労困憊している彼らには申し訳なかったが、中身についてきちんと考えて欲しかった。彼らは、会場をクロクスに移したことで、自分たちが自腹で大きな損失を補填したのだと主張した。私は「では、何故規模を縮小することを考えなかったの?」と聞いた。彼らは小さくすることは考えなかったという。「では、このイベントの目標は何?」と聞いたら、「人形を芸術として見せること」「教育」と答えた。それなら、今まで自分が関わってきた人形展とも一致する。では私がずっと感じている違和感は何なのだろう。

たとえばカタログをとっても、掲載料が高額なので出品者全員が掲載されているわけではない。これでカタログといえるのだろうか。出品者や来場者の真意を、主催者はどこまでくみ取っているのだろうか。

話が終わった後で、横にいた友人が付け足した。「目標を聞いたとき、カタログに書いてある『世界最大の』という言葉は言わなかったわね。」

なんのための「世界最大」なのだろうか。手の中から生まれてくるひとがた作りの喜びを、大ホールの展示会のコマのひとつに落とし込むことより、豊かな交流のために、ひいては市場の活性化、それこそ教育のために他にできることがあるのではなかろうか、と思う。逆に最大を望むなら、各国の作家が気持ち良く参加出来る状況を整え規模拡大を図るべきだろう。

今回、エカテリンブルグのフェスティバルに初めて参加したが、モスクワやサンクトペテルブルグとは全く対照的に、アットホームな展示会だった。規模は小さいが、参加作家のレベルは高く、ロシアらしい素朴であたたかな交流もあった。その町の風土や習慣にあった展示であり、どちらが優れているとは判断できないが、大都市にあってもこのような選択肢が増えていくと良いのではないかと思った。現に、日本では作品発表の選択肢がある。これはある意味で、改めて幸いなことだと思った。(羽関チエコ)



写真左上から時計回りに；
大島和代と作品、松沢香代展示風景、主催者と関係者のポートレート展示、チーム・コヤーラの展示、ブリギット・デヴァルの作品（中央）

EKATERINBURG



Natalia Domancevich (UDAA)



写真左上から時計回りに；
ウラル州立19世紀文学博物館、参加作家の一人イルチェニコが伝統にのっとり制作した民族人形、チーム・コヤーラ展示風景、同、ウラル創作人形作家協会集合写真、N.ドマセヴィッチ作品